

家族造形法の深度

(1)

早瀬 一男

「誰かやってみませんか？」
家族造形法との出会いはこの一言から始まりま
した。

最初の出会いは1988年です。「家族療法家
のための研究会（企画：鈴木浩二先生 牧原浩先
生）」主催の“家族療法ワークショップ”が国立
精神保健・神経センターで開催され、その講師が
「体験学派」として活躍中のBunny Duhlだったの
です。

しかし、参加を申し込んだ時点で、「家族造形
法」「体験学派」「Bunny Duhl」等を知っていた
訳ではありません。まったく理解していなかった
というのが正直なところです。

同僚から案内文を見せられた時、「一人でもい
いので、東京（正確には千葉県市川市ですが）に
行ってみよう！」となぜか思ったことを覚えてい
ます。

実は、1985年の家族療法専門課程（京都国
際社会福祉センター）との出会いも同じような感
じでした。先輩であった団士郎氏からの誘いに、
「やってみよう！」と思ったのがきっかけでした。
巡り合わせというか、出会って、本当に不思議
なものだと改めて痛感しています。

その当時の案内文が今も手元にあるのですが、
そこには講師の紹介として、以下のような記述が
あります。

『講師のBunny Duhlは家族造形法、特に
Boundary Sculptureの生みの親として知ら
れ、その著「Interpersonal Vulnerability Contract」
や「From the Inside Out」は家族療法家の
間で愛読されています。家族システムの様相を描
き出し、それを建設的な方向に変化させるベ
テランの治療者です。既に、家族造形法を臨床の
場に応用している方もかなりおられると思ひ
ますが、彼女の造形法にはバラティがあり、とて
もユニークで応用の範囲が極めて広く、シス
テム療法だけでなく、個人の精神分析療法に
も、またその訓練やスーパービジョンにも十分応
用可能であると言われていました。家 族と個人
のシステムの診断と治療に必ずや役立つものと確
信しております。』

グループのメンバーに推されて手を挙げた私
は、Bunny Duhlの絶妙なりードのもと、自分の育
った家族を「家族造形」として作る（再現する）
ことになったのです。彼女の素敵な人柄、衝撃的
と言えるような体験と気づき、家族造形法のバリ
エーションの学びが、その後、現在に至るまで家

家族造形法と付き合いしてきた所以です。

彼女のファンになった私は、1988年以降開催された数度のワークショップに殆ど参加することになりました（ちなみに、京都国際社会福祉センターでもワークショップが開催されました）。

改めて、家族造形法を紹介すると以下のようにまとめられるかもしれません。

家族造形法（Family Sculpture：家族彫像化技法とも言う）は1960年代後半に生まれ、Bunny Duhl、Peggy Papp、Virginia Satir などによって広められた技法です。

その特徴としては、まず、治療的側面です。家族内の対人関係を、「いま、ここで」の面接空間といった場を利用して、家族が各々のからだを用いて、視覚的・具体的に示すことによって、相互認知を深め、感情を分かち合おうとするものであるということです。その結果、家族の変化へとつながるのです。

さらに、診断的側面も有しています。それは、家族内の相互作用の様相、家族員相互の親密さや距離、家族の権威構造、非言語的コミュニケーションのパターンなどが、可視的・感覚的・象徴的に家族全体の枠組み（システム）の中で理解できるからです。

ジェノグラムが主に事実中心から家族理解を深めるとすれば、家族造形法は感情や体験、あるいは“はっきりしないもの”を扱うことができると言えるかもしれません。

さて、前述の案内文にあるように『造形法にはバラティ』があるのですが、それはあまり知られていないと思っています。

また『応用の範囲が極めて広い』ものなので、私自身は実際の相談場面よりも、現在は「事例検討会」や「家族造形法を通じた家族理解のための研修会」等で、定期的・不定期に活用しています。

まさに、『システム療法だけでなく、個人の精神分析療法にも、またその訓練やスーパービジョンにも十分応用可能』なのです。

さらには、団先生とともに、「援助者自身の自己覚知」のプログラムを実施してきましたが、その中でも「家族造形法」がベースになっています。

ところで、家族造形法の紹介は、例えば、「平木典子 中釜洋子共著 家族の心理」の中の一コ

マに「家族彫像化」の概略が記載されていますが、数少ないと思います。進め方（技法）は、「家族療法技法ハンドブック（星和書店）」の「第3章 彫像化技法 家族ふりつけ技法」に紹介されています。「家族療法研究 第3巻第1号」には「家族療法への招待（3）」として、かなり丁寧に紹介されています。

しかし、『造形法のバラティ』については、知られていない（実践されていない？）ように思いますので、今回のマガジン企画の一つとして、「家族造形法」に焦点を絞り、これまでの経験を「家族造形法の深化・進化・真価」、そして「家族造形法の深度」としてまとめてみることにしました。

次回以降の内容としては（あくまでも予定ですが）、家族造形法の進め方の紹介、さまざまなバリエーションの紹介（時にはBunny Duhから学んだバリエーションの紹介）を考えています。

家族造形法の特徴の一つは「視覚」であるだけに、「画像」を通じた発信にチャレンジできればと思っているのですが…。思うようにいかどうかは次回以降のお楽しみということで…。

いずれにせよ、執筆エントリーの底辺には、「この技法をそれぞれの対人援助現場で使ってみてもらいたい、いろいろなバリエーションを工夫してもらいたい」といった願いを込めています。

家族造形法は対人援助技法として、大変役立つものですので、お薦めですよ！